

筑波研究学園都市における 新旧住民の交流とアクセント

堀 口 純 子

I. はじめに

茨城県新治郡桜村は茨城県南部に位置し、アクセントの型の区別がなく、型知覚も失った無アクセントの地域である。ここは長い間純農村地帯であったが、筑波研究学園都市計画により村の38.8%が研究学園都市地域として都市開発が行われ、現在は既存の農村部と研究学園地区との全く異った2つの地域をかかえている。昭和45年には9198人であった人口が、47年からの学園地区への入居開始とともにふえ始め、54年12月には3万人をこえた。新しく移り住んだ新住民は47年3月には306人だったが、53年5月に新旧住民の数が逆転し、その後も新住民の数は増加を続けている。これらの新住民はほとんど東京およびその周辺にあった大学や研究機関の職員とその家族である。すなわち、東京アクセントの地域から来た人達である。東京に住んでいたからといって東京アクセントの型を持っているとは限らないが、無アクセントの桜村に東京アクセントがかなりの勢いで入って来ていることは確かである。村は新旧住民交流事業に力を入れ、各種の公民館活動やスポーツ大会などを催し、新旧住民の交流はかなりさかに行われている。このような交流が言語形成期に行われた場合、無アクセントの話者と東京アクセントの話者はお互いに相手のアクセントに何らかの影響を受けるものだろうか。もし影響を受けるとすれば、それはどのような形であらわれてくるものだろうか。

このような点に注目して、桜村の農村地区にある中学校と研究学園地区にある中学校でのアクセント調査を計画した。本稿では研究学園地区にある中学校で実施した調査の結果を報告し、言語形成期における無アクセントの話者と東京アクセントの話者の交流によるそれぞれのアクセントへの影響について考察する。

II. 調査について

1. 調査時期

昭和54年7月

2. 調査地点

茨城県新治郡桜村立竹園東中学校

この中学校は研究学園都市の開発にともなって、昭和49年4月に開校した。生徒のアクセントの傾向をつかむために、2年生81名に現在までの居住歴を書いてもらった。それによると新治郡で生まれ育った者は81名中10名で、71名は移住者である。その中には言語形成期のほとんどを有型アクセントの地域ですごして最近桜村に来た者もあれば、研究学園都市建設の初期に来て言語形成期のほとんどを桜村ですごしている者もある。表1は2年生81名が桜村で生活し始めて何年たったかを示す。これを見ると、移住者はすべて研究学園都市建設後に桜村に来たことが分かる。桜村に来て2年に満たない者が33名(41%)で、そのうち22名(27%)は54年4月に来たばかりである。

表1. 桜村に何年住んでいるか

年数	13~14	7	6	5	4	3	2	1	1年未満	合計
人数	10	3	1	7	10	6	11	11	22	81

表2は移住者71名が桜村へ来る前にどこに住んでいたかをアクセント形式によって分類したものである。71名のうち東京から来た者が24名(33.8%)で、それに神奈川、千葉、埼玉を加えると、43名(60.5%)が東京およびその近郊からの移住者ということになる。またアクセント形式を見ると、71名のうち55名(77%)が東京式アクセントの地域から来ている。

3. 調査対象

上記81名から次の条件にあう24名(男12名、女12名)を選んだ。

A 群: 茨城県新治郡で生まれ育った者8名(男4名、女4名)

B 群: 東京で生まれ育ち、桜村に移住して3年以上たつ者8名(男4名、女4名)

表 2. どこから桜村へ来たか

アクセント		地名	人数	アクセント形式別 人数合計
系譜	形式			
第一種	京阪式	京都	1人	5人 (7%)
		大阪	3	
		三重	1	
第二種	東京式	東京	24	55 (77%)
		千葉 ⁽¹⁾	9	
		神奈川	7	
		埼玉 ⁽²⁾	3	
		静岡	1	
		山梨	2	
		群馬	1	
		長野	2	
		広島	1	
		島根	1	
		福岡	1	
		岩手	1	
札幌	2			
第三種	京阪式	長崎	1	2 (3%)
		鹿児島	1	
第四種	一型式	茨城	4	4 (6%)
		海外	5	5 (7%)
				71 (100%)

(1) 千葉市

(2) 川口、入間、鳩ヶ谷

C 群：東京で生まれ育ち、54年4月に桜村に移住して来た者8名(男4名、女4名)

両親の出身地についても、A 群は茨城県、B 群・C 群は東京という条件をつけてみたが、実際には両親が東京という者は大変少なく、この条件ははずさざるをえなかった。調査対象に選んだ24名の両親の出身地を表3に、そのアクセント形式を表4に示す。

表 3. インフォーマントの両親の出身地

両親の出身地		人 数		
父	母	A群	B群	C群
茨 城	茨 城	7人		1
東 京	東 京		2	1
茨 城	東 京		1	
東 京	茨 城	1		
長 野	東 京		1	
山 梨	東 京		1	
群 馬	東 京			1
東 京	静 岡			1
埼 玉	広 島			1
新 潟	新 潟		1	
宮 城	宮 城			1
宮 城	岩 手		1	
福 島	福 島			1
青 森	鹿 児 島		1	
北 海 道	北 海 道			1

表 4. 両親の出身地のアクセント形式

アクセント形式		人 数		
父	母	A群	B群	C群
一型式	一型式	7人		3
東京式	東京式		5	5
一型式	東京式		2	
東京式	一型式	1		
東京式	京阪式		1	

4. 調査方法・項目

(1) 読む調査

漢字・かなまじりで書いた単語・句・文を読んでもらう。項目は名詞 33 語 (単独、文頭)、動詞 18 語 (終止形 12 語、過去形 6 語)、形容詞 20 語 (単独の終止形、文末の終止形、連体形、過去形、「～くなる」の形) である。

(2) 意識調査

被調査者が桜村と東京のアクセントの違いを意識しているかどうか、また、その違いに影響を受けていると感じているかどうかをアンケートにより調査した。

(3) 聞き取り調査

調査者がいくつかのアクセントで発音したものの中から被調査者が内省して自分のアクセントと同じだと思えるものを選ぶ。項目は名詞 10 語 (単独、文頭)、動詞 2 語 (終止形、過去形)、形容詞 12 語 (単独の終止形、文末の終止形、連体形、過去形、「～くなる」の形) である。

III. 名詞のアクセントの実態

1. 2 拍名詞

表 5 は中学生が実際に発音した 2 拍名詞のアクセントである。

A 群は単独の場合どの型の語にも ○● と ●○ の 2 つの型が見られ、また、助詞をつけて文の形で発音した場合にも、平板型名詞と頭高型名詞の発音にそれぞれ 3 つ、尾高型名詞の発音に 2 つの型が見られ、一定の型がないようである。しかし、その割合を見ると、平板型は 95%、尾高型は 93%、頭高型は 85% が東京式アクセントである。

B 群・C 群はどの型も安定している。

2 拍名詞のアクセントは、B 群と C 群は安定していて、A 群はそれに比べるとゆれが見られるが、東京アクセントを 90% 以上身につけているといえる。

2. 3 拍名詞

表 6 は中学生が実際に発音した 3 拍名詞のアクセントである。

平板型の 3 拍名詞は、B 群と C 群は安定している。A 群も単独の場合には 100%、助詞がつくと 92% が東京式アクセントで、ほぼ安定している。

「はさみ」の東京式アクセントは尾高型であるが、B 群・C 群ともに中高型

表 5. 2 拍名詞のアクセントの実態

東京式アクセントの型	調査語	単 独			文 頭				
		インフオ ーマント のアクセ ント	A群	B群	C群	インフオ ーマント のアクセ ント	A群	B群	C群
平板型	風・水・棒・ 人	○●	95.3	100	100	○●▶	95	100	100
		●○	4.7			○●▷	2.5		
						●○▷	2.5		
尾高型	雪・紙・川・ 花・事・部屋	○●	98.4	100	100	○●▷	87.5	100	95.2
		●○	1.6			○●▶	12.5		4.8
頭高型	空・糸・海・ 窓・本・今日	●○	92.9	100	98	●○▷	77.5	100	97.1
		○●	7.1		2	○●▷	20		2.9
						○●▶	2.5		

注 ●▶ は高い拍、○▷ は低い拍、▶▷ は助詞を示す。以下同じ。

が優勢である。A 群は尾高型と中高型が半々である。

「荷物」は B 群・C 群は 100% 東京式アクセントの頭高型である。A 群は 3 つの型が見られるが、75% が東京式アクセントである。

「力」は A 群は 87.5% が東京式アクセントの尾高型で、12.5% は中高型で発音している。B 群・C 群は尾高型で安定している。『明解日本語アクセント辞典』(以下『明解』と略す)では東京式の新しい型として ○●●▶ が認められているが、今回の調査では B 群に 1 例見られるだけである。

「刀」「頭」の一般的な型は尾高型であるが、中高型も「刀」については『明解』と『全国アクセント辞典』(以下『全国』と略す)で、「頭」については『明解』で認めている。3 群とも両方の型を使用しているが、古い型である尾高型の方が多い。

「心」の東京式アクセントは中高型で、『明解』では尾高型も認めている。3 群とも尾高型が優勢であるが、特に C 群は単独・文頭いずれの場合も、B 群は文頭の場合に、100% 尾高型である。ココロからココロへのようにアクセントの山を 1 つ後ろへずらすという現象はアクセントの自然な内的変化であるが、C 群ではその変化した新しいアクセントが完全に定着している。

表 6. 3 拍名詞のアクセントの実態

辞典による東京式 アクセント			調 査 語	単 独			文 頭				
明解	全国	NHK		インフォー マントのアクセント	A群	B群	C群	インフォー マントのアクセント	A群	B群	C群
平 板 型			かばん・時間・ 子供	○●●	100 %	100	100	○●●▶	91.7	100	100
								○●●▷	8.3		
尾 高 型			はさみ	○●●	50	14.3	28.6	○●●▷	50	25	42.9
				○●○	50	85.7	71.4	○●○▷	50	75	57.1
頭 高 型			荷物	●○○	75	100	100	●○○▷	62.5	100	100
				○●○	12.5			○●○▷	25		
				○●●	12.5			○●●▶	12.5		
尾高型 平板型	尾 高 型		力	○●●	87.5	100	100	○●●▷	87.5	93.8	100
				○●○	12.5			○●○▷	12.5		
								○●●▶		6.2	
尾 高 型 中 高 型	尾高型		刀・頭	○●●	81.3	56.3	81.3	○●●▷	75	81.3	93.7
				○●○	18.7	43.7	18.7	○●○▷	25	18.7	6.3
中高型 尾高型	中 高 型		心	○●●	75	75	100	○●●▷	87.5	100	100
				○●○	25	25		○●●▶	12.5		
頭 高 型 平 板 型	型		電車	●○○	12.5			●○○▷	12.5		
				○●●	87.5	100	100	○●●▶	62.5	100	100
								○●●▷	25		

「電車」は3冊の辞典に頭高型と新しい型である平板型の両方が記述されている。デンシヤからデンシヤへのようにアクセントの滝がなくなる現象はアクセントの自然な内的変化であるが、B群とC群では変化した新しいアクセントが完全に定着している。A群は頭高型のほかに東京式アクセントにはない尾高型も見られるが、優勢なのは平板型である。

3拍名詞では、B群とC群は平板型の名詞と頭高型の「荷物」は安定している。東京語でゆれている「力」「刀」「頭」では古い型が多く、「はさみ」「心」「電車」では新しい型が多い。A群は平板型の名詞は90%以上東京アクセントを身につけている。東京語でゆれている語では優勢なアクセントはB群・C群と同じ型であるが、その使用率はB群・C群より低い。

3. 4拍名詞

表7は中学生が実際に発音した4拍名詞のアクセントである。

平板型の4拍名詞は、B群とC群は安定している。A群も単独の場合には100%、助詞がついた場合には87.5%が東京式アクセントで、ほぼ安定している。

「図書館」は3群とも100%東京式アクセントである。

「雷」「年寄り」は尾高型と中高型(○●●○)が認められ、『日本語発音アクセント辞典』(以下『NHK』と略す)には平板型も記述されている。3群とも優勢なのは中高型である。清水郁子氏の昭和32年から36年の調査では「雷」はB型化¹⁾のおそい語と報告されている²⁾が、20年の間にかなりB型化が進んだといつてよいだろう。

「自動車」の東京式アクセントは○●○○だが、『NHK』では平板型も認めている。3群とも両方の型が見られるが、B群とC群は平板型の方が優勢で、A群は中高型の方が優勢である。A群では助詞をつけた場合に、東京式にはないアクセントが見られる。

「音楽」は3冊の辞典に頭高型と平板型の両方が記述されている。B群・C群は100%頭高型で、A群は頭高型が優勢であるが、平板型もあり、また、東京式にはないアクセントも見られる。

¹⁾ 三宅武郎氏によって、○●●●型(たとえばカミナリ)はA型、○●●○型(たとえばカミナリ)はB型と命名された。

²⁾ 清水郁子「東京のある四拍名詞のアクセント分布図——いわゆるAB型を中心として——」『独協大学教養諸学研究』6, 昭和47年, p. 25.

表 7. 4 拍名詞のアクセントの実態

辞典による東京式 アクセント			調 査 語	単 独			文 頭				
明解	全国	NHK		インフオー マントのア クセント	A群	B群	C群	インフオー マントのア クセント	A群	B群	C群
平 板 型			鉛筆・友達	○●●●	100%	100	100	○●●●▶	87.5	100	100
								○●●●▷	12.5		
中高型 (○●○○)			図書館	○●○○	100	100	100	○●○○▷	100	100	100
尾 高 型 中 高 型 (○●●○)	尾高型 中高型 平板型	雷・年寄り	○●●○	75	93.8	92.9	○●●○▷	93.8	87.5	78.6	
			○●●●	25		7.1	○●●●▷	6.2	12.5	14.3	
			○●○○		6.2		○●●●▶			7.1	
中 高 型 (○●○○)	中高型 平板型	自動車	○●○○	62.5	37.5	42.9	○●○○▷	62.5	37.5	42.9	
			○●●●	37.5	62.5	57.1	○●●●▶	12.5	62.5	57.1	
							○●●○▷	25			
頭 高 型 平 板 型	型 型	音楽	●○○○	75	100	100	●○○○▷	75	100	100	
			○●●●	12.5			○●●●▶	12.5			
			○●●○	12.5			○●●○▷	12.5			

4拍名詞では、B群とC群は平板型の名詞と「図書館」と「音楽」は安定している。東京語でゆれている「雷」「年寄り」では約90%が新しい型である中高型で、「自動車」は約60%が新しい型である平板型である。A群は平板型の名詞は90%以上、「図書館」は100%東京アクセントを身につけている。東京語でゆれている語のうち「雷」「年寄り」「音楽」の優勢なアクセントはB群・C群と同じ型であるが、その使用率はB群・C群より低く、また、「自動車」はB群・C群とは逆に中高型が優勢になっている。

表 8. 動詞の終止形のアクセントの実態

拍数	東京式アクセントの型	調 査 語	インフォーマントのアクセント	A群	B群	C群
2拍	平板型	乗る・聞く・行く・買う	○●	93.8%	100	100
			●○	6.2		
	頭高型	吹く・成る	●○	81.3	100	100
			○●	12.5		
			●●	6.2		
3拍	平板型	あける	○●●	87.5	100	100
			●●○	12.5		
	中高型	泳ぐ・走る	○●○	87.5	100	100
			○●●	12.5		
4拍	平板型 中高型 (○●●○)	飲み込む	○●●○	62.5	87.5	71.4
			○●●●	37.5	12.5	28.6
5拍	中高型 (○●●○)	振り回す	○●●○	75	87.5	71.4
			○●●○	12.5		28.6
			○●●●	12.5	12.5	
	平板型 中高型 (○●●○)	よじ登る	○●●○	62.5	100	100
			○●●○	12.5		
			○●●●	25		

IV. 動詞のアクセントの実態

1. 終止形

表8は中学生が実際に発音した動詞の終止形のアクセントである。

A群はどの語にも2つか3つのアクセントがあるが、優勢なのはいずれも東京式アクセントである。東京語でゆれている「飲み込む」と「よじ登る」は新しい型である中高型が優勢である。

B群・C群は「飲み込む」と「振り回す」以外の10語は100%東京式アクセントである。東京語の中でゆれている「飲み込む」は新しい型である中高型の方がB群・C群ともに優勢で、「よじ登る」はB群・C群ともに100%新しい型で発音している。

2. 過去形

表9は中学生が実際に発音した動詞の過去形のアクセントである。

「切った」「積もった」は3群とも100%東京式アクセントである。「咲いた」「鳴った」は、B群・C群は100%東京式で、A群は2つの型があるが、優勢なのは東京式である。「飲み込んだ」「よじ登った」の東京式アクセントは平板型であるが、3群とも中高型が優勢で、特にB群・C群の「よじ登った」は

表9. 動詞の過去形のアクセントの実態

拍数	東京式アクセントの型	調査語	インフォーマントのアクセント	A群	B群	C群
3拍	平板型	咲いた・鳴った	○●●	87.5%	100	100
			●○○	12.5		
	頭高型	切った	●○○	100	100	100
4拍	中高型 (○●○○)	積もった	○●○○	100	100	100
5拍	平板型	飲み込んだ	○●●○○	62.5	87.5	85.7
			○●●●●	37.5	12.5	14.3
6拍	平板型	よじ登った	○●●●○○	87.5	100	100
			○●●●●●	12.5		

100% 中高型である。

V. 形容詞のアクセントの実態

1. 3拍語第I類

表10は中学生が実際に発音した3拍形容詞第I類のアクセントである。

表 10. 3拍形容詞第I類のアクセントの実態

調査語	活用形		東京式アクセントの型	インフォーマントのアクセント	A群	B群	C群
赤い 重い 厚い 暗い 軽い	終 止 形	単 独	平 板 型	○●●	57.5%	52.5	52.5
				○●○	37.5	47.5	47.5
				●○○	5		
	形	文 末	平 板 型	○●●	60	45	28.6
				○●○	37.5	55	71.4
				●○○	2.5		
	連 体 形		平 板 型	○●●	62.5	92.5	74.3
				○●○	35	7.5	25.7
				●○○	2.5		
	過 去 形		中 高 型 (○○ <u>カッタ</u>)	○○ <u>カッタ</u>	77.5	85	80
				○○ <u>カッタ</u>	22.5	2.5	20
				○○ <u>カッタ</u>		12.5	
	～ く な る		中 高 型 (○○ <u>クナル</u>)	○○ <u>クナル</u>	52.5	85	82.9
				○○ <u>クナル</u>	20		5.7
				○○ <u>クナル</u>	10	15	8.6
				○○ <u>クナル</u>			2.8
				○○ <u>クナル</u>	7.5		
				○○ <u>クナル</u>	10		

最近東京の若い層には、平板型形容詞が中高型になる傾向が見られる³⁾が、本調査でも両方の型が見られる。B群・C群は単独に発音した場合は平板型がやや優勢で(B群 52.5%、C群 52.5%)、文末に来ると逆に中高型の方がやや優勢になる(B群 55%、C群 71.4%)。連体形の場合はB群・C群とも平板型が優勢で(B群 92.5%、C群 74.3%)、終止形に比べるとまだ安定した状態にある。B群にもC群にもかなり新しい型が見られるが、両者を比較すると、C群の方が新しい型をより多く使用している。A群には平板型、中高型、頭高型の3つの型が見られるが、単独・文末・連体形のいずれの場合も、平板型が60%前後である。

過去形は3群とも東京語の一般的な型である $\overline{\text{〇〇}}$ カッタ が優勢である。B群には東京の古い型である 〇〇 カッタ が12.5%ある。そのほか第II類の過去形と同じ $\overline{\text{〇〇}}$ カッタ もどの群にも見られ、特にA群とC群は約20%がこの型である。

「～くなる」の形は、B群・C群では東京の一般的な型である $\overline{\text{〇〇}}$ クナル が優勢で、A群でも53%はこの型である。A群には $\overline{\text{〇〇}}$ クナル、 $\overline{\text{〇〇}}$ クナルのように前に山があつて、最後の拍がまた高くなる発音が17.5%ある。

2. 3拍語第II類

表11は中学生が実際に発音した3拍形容詞第II類のアクセントである。

A群は、終止形・連体形ともに中高型がやや多いが、平板型も半分近くある。B群は、終止形の場合は100%東京式アクセントである中高型で、連体形の場合には平板型がわずかに見られる。C群も、終止形・連体形ともに中高型が優勢であるが、平板型も約10%見られる。

過去形は、A群とB群は第I類の過去形と同じ $\overline{\text{〇〇}}$ カッタ が多く、C群は東京の一般的な型である $\overline{\text{〇〇}}$ カッタ が多い。3拍形容詞の過去形は、A群とB群ではI類とII類の区別がなく $\overline{\text{〇〇}}$ カッタ が優勢で、C群ではI類とII類の区別をして、それぞれ東京式アクセントが優勢である。

「～くなる」の形は3群とも不安定である。A群には5種類のアクセントが見られるが、一番多いのは $\overline{\text{〇〇}}$ クナル (42.5%)である。第I類の場合同様最

³⁾ 秋永一枝「共通語のアクセント」『日本語発音アクセント辞典』、昭和53年、p. 88。

稲垣滋子、堀口純子「東京語におけるアクセントのゆれ——地域差・意識と実態」『ことばの諸相』文化評論出版、昭和54年、pp. 72~80。

表 11. 3 拍形容詞第 II 類のアクセントの実態

調査語	活用形		東京式アクセントの型	インフォーマントのアクセント	A群	B群	C群
長い 早い 熱い 強い 細い	終	単独	中 高 型	○●○	52.1%	100	88.1
				○●●	47.9		11.9
	止	文末	中 高 型	○●○	60.7	100	95.9
				○●●	37.5		4.1
				●○○	1.8		
	連体形		中 高 型	○●○	58.3	93.8	85.7
				○●●	41.7	6.2	14.3
	過去形		頭 高 型	○○ <u>カッタ</u>	25	20	68.6
				○○ <u>カッタ</u>	75	80	31.4
	～くなる		頭 高 型	○○ <u>クナル</u>	20	35	45.7
				○○ <u>クナル</u>	42.5	47.5	11.4
				○○ <u>クナル</u>	22.5	17.5	42.9
				○○ <u>クナル</u>	2.5		
				○○ <u>クナル</u>	12.5		

後の拍が高くなる型 (○○クナル、○○クナル) が 15% ある。B 群は、東京の一般的な型 ○○クナル (35%) より新しいと思われる ○○クナル (47.5%) の方が多く、そのほかに ○○クナル (17.5%) も見られる。C 群は、東京の一般的な型 ○○クナル (45.7%) と ○○クナル (42.9%) がほぼ同じで、ほかに ○○クナル が 11% 見られる。

3. 4 拍語第 I 類

表 12 は中学生が実際に発音した 4 拍形容詞第 I 類のアクセントである。

3 拍の平板型形容詞の場合と同じように、終止形と連体形にゆれが目立つが、これは最近の東京の若い層にも見られる傾向である⁴⁾。A 群は、終止形の場合

4) 3) と同じ。

表 12. 4 拍形容詞第 I 類のアクセントの実態

調査語	活用形	東京式アクセントの型	インフォーマントのアクセント	A群	B群	C群
明るい 悲しい 優しい 冷たい おいしい	終止形	平板型	○●●●	32.5%	52.5	25.7
			○●●○	60	47.5	74.3
			○●○○	7.5		
	文末	平板型	○●●●	40	47.5	20
			○●●○	60	52.5	80
	連体形	平板型	○●●●	57.5	92.5	82.9
			○●●○	42.5	7.5	17.1
	過去形	中高型 (○○○カッタ)	○○○カッタ	92.5	100	100
			○○○カッタ	5		
			○○○カッタ	2.5		
			○○○クナル	45	82.5	82.9
			○○○クナル	47.5	15	17.1
	～くなる	中高型 (○○○クナル)	○○○クナル		2.5	
			○○○クナル	2.5		
			○○○クナル	5		
○○○クナル						

は中高型が 60% でやや多く、連体形の場合は逆に平板型が 57.5% とやや多い。B 群は、終止形の場合は平板型と中高型がだいたい半々であるが、連体形の場合は平板型が 92.5% と圧倒的に優勢である。C 群は、終止形の場合は新しい型である中高型が優勢で、連体形の場合は平板型が優勢である。B 群も C 群も連体形は東京の一般的な型である平板型が優勢で、終止形に比べるとまだ安定した状態にある。B 群と C 群の平板型の使用率を見ると、単独 (B 群 52.5%、C 群 25.7%)、文末 (B 群 47.5%、C 群 20%)、連体形 (B 群 92.5%、C 群 82.9%) のいずれの場合も、C 群より B 群の方が東京の一般的な型をより多く使用している。

過去形は、A 群には 3 つの型があるが、優勢なのは東京式アクセントである。B 群・C 群は 100% 東京式アクセントである。

「～くなる」の形は、A群では $\overline{\text{○○○}}$ クナル と東京式アクセントの $\overline{\text{○○○}}$ クナル が半々で、そのほかに2つのアクセントが少しずつある。3拍形容詞の「～くなる」の形に見られた1度さがって最後の拍が高くなる発音が4拍語でも少し見られる。B群・C群は東京式アクセントが優勢であるが、第II類のアクセントである $\overline{\text{○○○}}$ クナル も少しある。

4. 4拍語第II類

表13は中学生が実際に発音した4拍形容詞第II類のアクセントである。

表13. 4拍形容詞第II類のアクセントの実態

調査語	活用形	東京式アクセントの型	インフォーマントのアクセント	A群	B群	C群
かわいい 短い うれしい 涼しい 親しい	終 止 形	単独 中高型 (○●●○)	○●●○	82.5%	97.5	94.3
			○●●●	15	2.5	5.7
			○●○○	2.5		
	形 文末	中高型 (○●●○)	○●●○	72.5	87.5	94.3
			○●●●	25	12.5	5.7
			○●○○	2.5		
	連体形	中高型 (○●●○)	○●●○	82.5	97.5	94.3
			○●●●	15	2.5	5.7
			○●○○	2.5		
	過去形	中高型 ($\overline{\text{○○○}}$ カッタ) (○○○ カッタ)	$\overline{\text{○○○}}$ カッタ	97.5	100	100
			$\overline{\text{○○○}}$ カッタ	2.5		
～くなる	中高型 ($\overline{\text{○○○}}$ クナル) (○○○ クナル)	$\overline{\text{○○○}}$ クナル	77.5	87.5	80	
		$\overline{\text{○○○}}$ クナル	17.5	12.5	20	
		$\overline{\text{○○○}}$ クナル	5			

単独、文末、連体形のいずれの場合にも、A群には3つ、B群・C群には2つの型が見られるが、A群は79%、B群とC群は94%が東京式アクセントの ○●●○ である。

過去形は、東京の古い型である $\overline{\text{○○}}\text{カッタ}$ は A 群に少しあるだけで、あとは、A 群は 97.5%、B 群・C 群は 100% 東京の新しいと思われる型 $\overline{\text{○○○}}\text{カッタ}$ である。B 群・C 群の 4 拍形容詞の第 I 類と第 II 類の過去形はどちらも $\overline{\text{○○○}}\text{カッタ}$ で安定している。

「～くなる」の形は、3 群とも東京の新しいと思われる型 $\overline{\text{○○○}}\text{クナル}$ が優勢で、I 類の型である $\overline{\text{○○○}}\text{クナル}$ も見られるが、東京の一般的な型 $\overline{\text{○○○}}\text{クナル}$ は B 群にも C 群にも全くない。

5. まとめ

A 群は B 群・C 群に比べて型の種類が多く不安定で、I 類の平板型形容詞と II 類の中高型形容詞の間に区別がない。これは B 群・C 群の場合のようにもとは区別があったものが一方に統合して区別がなくなってきたのとは性格を異にする。過去形も I 類と II 類の区別がなく、3 拍語も 4 拍語も I 類の東京式アクセントが優勢である。

B 群・C 群は、I 類では連体形、過去形、「～くなる」の形が、II 類では終止形、連体形が、安定してもとの型を保っている。

I 類の平板型形容詞の終止形はゆれがはげしく、起伏型に移る傾向が顕著であり、II 類の終止形の型に統合しようとしている。

II 類の過去形は I 類の型に統合しようとする傾向が見られる。この新しい型 ($\overline{\text{○○}}\text{カッタ}$ 、 $\overline{\text{○○○}}\text{カッタ}$) は、もとの型より山を 1 つ後ろへずらすというアクセントの内的変化によるものであり、しかも I 類の過去形と同じ型であるから、かなり有力な型である。

II 類の「～くなる」の形はゆれがはげしいが、東京の一般的な型 ($\overline{\text{○○○}}\text{クナル}$ 、 $\overline{\text{○○○}}\text{クナル}$) より、山を 1 つ後ろへずらした型 ($\overline{\text{○○}}\text{クナル}$ 、 $\overline{\text{○○○}}\text{クナル}$) と I 類と同じ型 ($\overline{\text{○○}}\text{クナル}$ 、 $\overline{\text{○○○}}\text{クナル}$) の方が多い。

形容詞の新しいと思われる型の使用率を B 群と C 群で比較すると次のようになる。

(1) I 類の平板型形容詞の終止形・連体形が中高型になる傾向

3 拍語第 I 類	終止形	
	単 独	B=C
	文 末	B<C
	連体形	B<C

4 拍語第 I 類	終止形	
	単独	B<C
	文末	B<C
	連体形	B<C

I 類の平板型形容詞の終止形・連体形では C 群の方が新しい型の使用率が高い。B 群は東京をはなれて3年から6年たつが、C 群は平板型形容詞のアクセント変化のはげしい東京に調査時の3か月前までいたため、それだけ新しい型を持っている率が高いのであろう。

(2) II 類の起伏型形容詞の過去形と「～くなる」の形がアクセントの山を1つ後ろへずらす傾向

3 拍語第 II 類	過去形	B>C
	「～くなる」の形	B>C
4 拍語第 II 類	過去形	B=C
	「～くなる」の形	B>C

II 類の起伏型形容詞の過去形と「～くなる」の形では、B 群の方が新しい型の使用率が高い。この現象はアクセントの内的変化であるから東京からはなれても起こりうる変化であるが、それが桜村に來た東京語の話者の間でかなり進んでいるということであろう。

VI. 優勢なアクセントと安定度

1. 型の数

今回の調査で取り扱った延べ語数は、名詞 66 語 (単独 33 語、文頭 33 語)、動詞 18 語 (終止形 12 語、過去形 6 語)、形容詞 100 語 (単独の終止形 20 語、文末の終止形 20 語、連体形 20 語、過去形 20 語、「～くなる」の形 20 語) で、合計 184 語である。表 14 は 184 語のそれぞれの発音に見られたアクセントの型の数を品詞別にまとめたものである。この表をもとにして、型数別に語数を合計したのが表 15 で、型の数の平均を品詞別に表したものが表 16 である。

型が1つでアクセントが安定しているのは、A 群 47 語、B 群 109 語、C 群 110 語である。すなわち、A 群 137 語、B 群 75 語、C 群 74 語は型が2つ以上あるわけである。このうち A 群 14 語、B 群 8 語、C 群 7 語に見られる2つの型は辞典に記述されているものである。したがって、東京式アクセントとして辞典に記述されていないアクセントで発音された語は、A 群 129 語、B 群

表 14. 品詞別に見たアクセントの型の数と語数

品 詞		型の数	語 数			
			A 群	B 群	C 群	
名 詞		1	31 語	51	53	
		2	30	15	12	
		3	5		1	
動 詞		1	4	15	15	
		2	11	3	3	
		3	3			
形 容 詞	I 類 (平板型)	終止形	1			1
			2	14	20	19
			3	6		
		連体形	1		6	5
			2	9	4	5
			3	1		
	II 類 (中高型)	終止形	1	1	16	14
			2	16	4	6
			3	3		
		連体形	1	3	7	8
			2	7	3	2
			3			
	過去形		1	8	10	10
			2	11	9	10
			3	1	1	
しくなる		1		4	4	
		2	11	13	14	
		3	9	3	2	

表 15. アクセントの型の数と語数

型の数	語 数		
	A 群	B 群	C 群
1	47 語	109	110
2	109	71	71
3	28	4	3

表 16. 品詞別に見たアクセントの型の数の平均

品 詞			型の数の平均		
			A 群	B 群	C 群
名 詞			1.6	1.2	1.2
動 詞			1.9	1.2	1.2
形 容 詞	Ⅰ類	終止形	2.1	2	2
		連体形	2.1	1.4	1.5
	Ⅱ類	終止形	2.1	1.2	1.3
		連体形	1.7	1.3	1.2
	過 去 形		1.7	1.6	1.5
	～ くなる		3.5	2	1.9

67 語、C 群 67 語である。A 群はこのうち 28 語が、3 つの型で発音されている。B 群・C 群で 3 つの型で発音されている語は、B 群 4 語、C 群 3 語とわずかで、あとは型は 2 つである。この 2 つの型のうち、辞典に記述されていない方の型には、東京アクセントの新しい傾向を表すものが多い。この中で使用率が 50% 以上のものを表 17 に示す。昭和 52 年に東京の中学校で調査した時にも、これと同じ傾向が見られた⁵⁾。したがって、表 17 に示されている B 群・C 群の優勢なアクセントは、最近の東京の若い層のアクセントであるといえよう。このように B 群が C 群や東京の中学生と同じように、東京の若い層のアクセントを身につけているということは、桜村に 3 年以上住んでも、桜村の従

⁵⁾ 稲垣・堀口、pp. 67~68. pp. 72~80.

表 17. 東京式アクセントと異なる B 群・C 群の優勢なアクセント

調査語	語の形式		東京式アクセント	B群・C群の優勢なアクセント	優勢なアクセントの使用率	
					B群	C群
はさみ	単	独	○●●	○●○	85.7%	71.4
	文	頭	○●●▷	○●○▷	75	57.1
飲み込んだ	過	去形	○●●●●	○●●○○	87.5	85.7
よじ登った	過	去形	○●●●●●	○●●●○○	100	100
赤い・重い・厚い・暗い・軽い	終止形文末		○●●	○●○	55	71.4
明るい・悲しい・優しい・冷たい・おいしい	終止形	単独	○●●●	○●●○		74.3
		文末	○●●●	○●●○	52.5	80
長い・早い・熱い・強い・細い	過	去形	〇〇カッタ	〇〇カッタ	80	

来のアクセントの影響はほとんど受けていないということであろう。

表 16 は 1 語の発音に見られるアクセントの型の数の平均を示すが、それによると、どの場合も A 群の型の数が多い。すなわち、B 群・C 群に比べて、A 群はアクセントの安定度が低いということが分かる。また、品詞別に見ると、平板型形容詞の終止形と形容詞の「～くなる」の形は、3 群とも安定度が低い。

2. 東京式アクセントの使用率

各項目における優勢なアクセントを見ると、ほとんど東京式アクセントである。優勢なアクセントが東京式アクセントでないものは、3 拍名詞、動詞の過去形、形容詞第 I 類の終止形、形容詞第 II 類の過去形と「～くなる」の形などである。そこで、東京式アクセントが各群でどれ位使用されているかを見ると、表 18 のようになる。

表 18. 東京式アクセントの使用率

品 詞			使 用 率		
			A 群	B 群	C 群
名 詞			80.8	87.6	88
動 詞			79.2	83.3	82.1
形 容 詞	Ⅰ類	終止形	47.5	49.4	31.7
		連体形	60	92.5	78.6
	Ⅱ類	終止形	67	96.3	93.2
		連体形	70.4	95.7	90
	過 去 形		73.1	76.3	87.2
	～ くなる		48.8	72.5	72.9
平 均			69.5	81.8	79.7

型の数だけを見ると(表 14~16)、A 群のアクセントには一定の型がないように見えるが、アクセントの使用率を見ると(表 18)、東京式アクセントを 70% 身につけていることが分かる。しかし、東京式アクセントの使用率は品詞によって差があり、名詞と動詞は約 80%、形容詞は約 60% が東京式アクセントである。

B 群は 82%、C 群は 80% が東京式アクセントである。すなわち、B 群では 18%、C 群では 20% が、辞典で東京式アクセントと認められていないアクセントで発音されていることになる。これがもっとも多いのは平板型の形容詞で、他の品詞に比べ B 群も C 群もはげしいゆれを見せている。平板型形容詞の起伏化は最近の東京語における著しい傾向であるが、54年3月まで東京にいた C 群は特にその傾向を顕著にあらわし、50% 以上起伏化している。東京を離れて3年以上たつ B 群は、C 群同様ゆれてはいるが、従来の東京式アクセントを 50% 以上残している。

VII. アクセントに対する意識

ことばやアクセントに対する意識を見るために、24名の生徒に選択方式によ

るアンケート調査を行った。

設問 1.

- A 群—東京などから来た人が話す時のアクセントは、あなたのアクセントとちがうと思いますか。
- B 群・C 群—桜村の人が話す時のアクセントは、あなたのアクセントとちがうと思いますか。

表 19. 設問 1 の結果

設問 1 に対する答	人 数		
	A 群	B 群	C 群
大変ちがう	2 人	3	
同じところもあるが、ちがう方が多い	3	4	4
ちがうところもあるが、同じ方が多い		1	4
まったく同じ	1		
わからない	2		

A 群では、桜村と東京のアクセントの違いが意識できない生徒が 3 人いる。これは無アクセント地域で生まれ育って、型知覚がないためであろう。B 群・C 群は全員違いを意識しているが、違いを大きく感じているのは B 群の方である。C 群は桜村に来てまだ 3 か月で、接触する人の範囲も限られ、従来の桜村のアクセントにまだあまり接していないため、東京アクセントとの違いを B 群ほどには感じていないのであろう。

設問 2.

- A 群—東京などから来た人と同じ学校で勉強するようになって、あなたのことばは変わったと思いますか。
- B 群・C 群—桜村に来てから今までの間にあなたのことばは変わったと思いますか。

この設問では「ことば」という語を使ったので、「変わった」と答えた者が必ずしもアクセントの変化を意味しているとは限らない。

A 群の場合は、6 名が自分のことばが変わったと思っている。無アクセント

表 20. 設問 2 の結果

設問 2 に対する答	人 数		
	A群	B群	C群
とても変わった	3人	2	1
少し変わった	3	1	3
ほとんど変わらない		5	3
全然変わらない	1		1
わからない	1		

地域で生まれ育ちながら、東京式アクセントを70%身につけているという調査結果から見ると、「東京などから来た人と同じ学校で勉強するようになって」A群の8名のアクセントには変化があり、6名はその変化を意識していると考えられる。そのほかに語彙などの変化も考えられるが、被調査者が自分自身のことばのどのような変化を意識しているのかを見るには、調査が不十分であった。

B群で自分のことばが変わったと思っているのは3名、C群では4名である。B群は82%、C群は80%が従来の東京式アクセントで、残りのB群18%、C群20%のほとんども新しいと考えられる東京アクセントであるという調査結果から見て、B群・C群では「桜村に来てから今までの間に」アクセントに変化があったとは考えられない。7名(B群3名、C群4名)が変わったと意識しているのは、主に、文末の助詞や句末・文末のイントネーションなどであろう。

設問 3.

学校で話す時と家で話す時と、ことばを使い分けることがありますか。

A群では、半数の4名は学校でも家でも茨城のことばを使い、3名は学校では東京のことばで家では茨城のことばと使い分けている。学校で東京のことばを使っている3名のうち2名は、設問2に対して、自分のことばがとても変わったと答えている。A群には、学校でも家でも東京のことばを使うと答えた者が1名ある。この生徒のアクセントを取り出して調べてみると、名詞と動詞は100%東京式アクセントで、形容詞も従来の東京式アクセントか新しいと考えられる東京アクセントのどちらかで、アクセントは完全に東京式である。茨城

表 21. 設問 3 の結果

設問 3 に対する答	人 数		
	A群	B群	C群
学校では東京的なことばを使い、家では茨城的なことばを使う	3人		
学校では茨城的なことばを使い、家では東京的なことばを使う		1	1
学校でも家でも茨城的なことばを使う	4		3
学校でも家でも東京的なことばを使う	1	7	4

県新治郡で生まれ、言語形成期を新治郡桜村で過ごし、現在もそこに住んでいて、しかも両親とも茨城県出身であるにもかかわらず、家でも東京のことばを使っているというのは興味深い。

B 群では7名が使い分けずに、学校でも家でも東京のことばを使っている。

C 群も半数の4名は使い分けずに、学校でも家でも東京のことばを使っている。しかし、あとの4名は、東京から転校してきてまだ3か月であるにもかかわらず、学校では茨城のことばを使っている。一般に小学校や中学校のころに転校した場合、新しい環境に適應するためにまずその土地のことばを使おうとし、やがてそのことばを完全に使いこなすことができるようになる。C 群にも新しい土地のことばを使おうとしている姿が見られるが、実際には東京語の話者が多い土地であるため、しばらくたつと B 群のように学校でも家でも東京のことばに落ち着いてしまうのかもしれない。

VIII. 聞き取り調査による型知覚

聞き取り調査では、読む調査で使用した語彙の中から名詞 10 語 (単独、文頭)、動詞 2 語 (終止形、過去形)、形容詞 12 語 (単独の終止形、文末の終止形、連体形、過去形、「～くなる」の形) を選び、調査者がそれぞれ 3 種類のアクセントで発音した。発音は 2 回ずつ行った。被調査者は調査者の発音を聞いて、自分のアクセントと同じものを選んで番号に○をつけ、また、自分と同じものがない場合には「なし」の項に○をつける。

読む調査と聞き取り調査の結果をつき合わせ、同一の被調査者の実際の発音と内省した型とがくいちがう割合を表 22 (名詞・動詞の場合) と表 23 (形容詞

表 22. 実際の発音と内省した型とのくいちがい (名詞・動詞)

品詞	調 査 語	東京式アクセント	くいちがいの割合		
			A群	B群	C群
名 詞	はさみ	○●●▷	50%	6.3	18.8
	力	○●●▷ ○●●▶	43.8	0	12.5
	刀・頭	○●●▷ ○●○▷	25	28.1	31.3
	心	○●○▷ ○●●▷	62.5	25	31.3
	電車	●○○▷ ○●●▶	18.8	12.5	12.5
	図書館	○●○○▷	43.8	0	0
	雷・年寄り	○●●●▷ ○●●○▷	53.1	12.5	28.1
	自動車	○●○○▷ ○●●●▶	31.3	12.5	50
	平 均		41	12.1	19.2
動 詞	飲み込む、よじ登る	○●●● ○●●●● ○●●○ ○●●●○	50	6.3	18.8
	飲み込んだ、よじ登った	○●●●● ○●●●●●	37.5	0	31.3
	平 均		43.8	3.2	25.1

の場合) に示す。

A 群は名詞 41%、動詞 44%、形容詞 45% が実際の発音と内省した型にくいちがいがあり、B 群・C 群に比べると高率である。しかし逆に言うと、名詞 59%、動詞 56%、形容詞 55% は、自分のアクセントを内省して、その型を知覚できるということである。無アクセント地域で言語形成期を過ごした人は、ふつう自分のアクセントを内省してもその型が知覚できないが、A 群の生徒が 50% 以上も自分のアクセントを内省してその型が知覚できるということは、東京式アクセントを持った新住民との接触による影響であろう。

B 群のくいちがいは、名詞 12%、動詞 3%、形容詞 13% で、実際の発音と内省した型はかなり一致している。聞き取り調査の延べ語数は、名詞 20 語 (10 語×2)、動詞 4 語 (2 語×2)、形容詞 60 語 (12 語×5) の 84 語であるが、そのうち 33 語については、B 群の全員が実際の発音と内省した型が一致している。

表 23. 実際の発音と内省した型とのくいちがひ (形容詞)

類別	調査語		東京式アクセント	くいちがひの割合		
				A群	B群	C群
3拍I類	赤い・重い・暗い	単 独	○●●	45.8%	28.6	28.6
		文 末	○●●	50	0	38.1
		連 体 形	○●●	33.3	9.5	42.9
		過 去 形	○○カッタ	45.8	4.8	28.6
		～くなる	○○クナル	58.3	19	47.6
3拍II類	長い・早い・強い	単 独	○●○	45.8	0	14.3
		文 末	○●○	29.2	0	0
		連 体 形	○●○	29.2	0	4.8
		過 去 形	○○カッタ	62.5	38.1	19
		～くなる	○○クナル	58.3	28.6	47.6
4拍I類	明るい 冷たい おいしい	単 独	○●●●	50	28.6	57.1
		文 末	○●●●	33.3	19	14.3
		連 体 形	○●●●	50	38.1	28.6
		過 去 形	○○○カッタ	41.7	0	9.5
		～くなる	○○○クナル	79.2	14.3	38.1
4拍II類	かわいい 短い うれしい	単 独	○●●○	43.8	0	0
		文 末	○●●○	25	0	7.1
		連 体 形	○●●○	31.3	0	21.4
		過 去 形	○○○カッタ ○○○カッタ	31.3	0	21.4
		～くなる	○○○クナル ○○○クナル	56.3	28.6	57.1
平 均				45	12.9	26.3

C 群のくいちがいは、名詞 19%、動詞 25%、形容詞 26% で、B 群に比べると高率である。聞き取り調査に選んだ語彙は東京語でアクセントがゆれているものが多いが、アクセントがゆれていれば、実際の発音と内省した型にはくいちがいが起こりやすい。C 群のくいちがいは、東京語におけるアクセントのゆれに起因するものであろう。この C 群のくいちがいがどんなものであるかを見るために、実際の発音と内省した型を比較してみると、実際の発音は新しい型で、内省した型は従来の東京式アクセントの型というちがいが多い。

IX. お わ り に

今回の調査では、桜村で生まれ育った中学生 (A 群)、東京で生まれ育ち、桜村に移住して 3 年以上になる中学生 (B 群)、東京で生まれ育ち、桜村に移住して 1 年未満の中学生 (C 群) の 3 つのグループを対象とし、各グループのアクセントの実態、茨城のことばと東京のことばに対する意識、実際の発音と自分のアクセントを内省して知覚した型との一致・不一致などを取り上げた。

A 群については次のようなことが明らかになった。

- ① 型の数が多く型が一定していないという無アクセントの姿を見せながらも、優勢な型は東京式で、東京式アクセントを約 70% 身につけている。
- ② 東京からの転校生と接触するようになって、自分のことばが変わったと思っている者が多い。
- ③ 50% 以上が自分のアクセントを内省して、それと同じ型を知覚することができる。

無アクセント地域で生まれ育ち、しかも 8 人中 7 人は両親も無アクセント地域の出身である A 群に、上のような事実が見られるということから、A 群はかなりの勢いで入って来た東京式アクセントとの接触により、その影響を大きく受けていると考えられる。

平山輝男氏は、茨城県東海村などの例から、有型アクセントの移住者の影響を受けて、従来の無アクセント地域内に有型アクセントの人が生まれ育っていることを確認し、無アクセント地域の中に有型アクセント地区ができる可能性を示唆しておられる⁶⁾。A 群のように従来の桜村の住民で言語形成期にある者

⁶⁾ 平山輝男「移住者二世の言語——特に無アクセント地域の場合」『国語学』114、昭和53年、p. 43。

が東京式アクセントの影響を受けていること、桜村への移住者は今後まだ増加すること、桜村で生まれた移住者の二世がこれから言語形成期を迎えることなどを考え合わせると、従来無アクセント地域であった桜村にも有型アクセント地区ができる可能性は十分考えられる。

B 群については次のようなことが明らかになった。

- ① 型が安定していて、従来の東京式アクセントを 82% 身につけている。
- ② 東京語でアクセントがゆれている語では、新しいと思われる東京式アクセントの使用も見られるが、その使用率は C 群に比べると低い。
- ③ アクセントの内的変化による新しい型は、C 群より多く使用している。
- ④ 茨城のことばと東京のことばはかなり違うという意識を持っているが、学校でも家でも東京のことばを使う者が多い。
- ⑤ 実際の発音と自分のアクセントを内省して知覚した型とが、よく一致している。

言語形成期の初期を東京で過ごし、途中から無アクセント地域に移住して来た B 群に、上のような事実が見られるということから、B 群は言語形成期の初期に習得した東京式アクセントを無アクセント地域に移住しても持ち続け、無アクセントと接触してもその影響はほとんど受けていないと考えられる。

また、③の事実から、アクセントの山を1つ後ろへずらすというようなアクセントの自然な内的変化は、東京からはなれていても起こりうるということが分かる。

C 群については次のようなことが明らかになった。

- ① 型が安定していて、従来の東京式アクセントを 80% 身につけている。
- ② 東京語でアクセントがゆれている語の発音はゆれがはげしく、最近の東京の若い層の傾向がかなり見られる。
- ③ 茨城のことばと東京のことばの違いを多かれ少なかれ意識していて、半数の者は学校では茨城のことばを使おうとしている。
- ④ 実際の発音と自分のアクセントを内省して知覚した型は、かなり一致している。
- ⑤ 東京語でアクセントがゆれている語では、内省した型は従来の東京式アクセントの型であっても、実際には新しいと思われる型で発音している例が多い。

東京で生まれ、言語形成期を東京で過ごして、3 か月前に無アクセント地域へ移住して来た C 群は、両地のことばの違いを意識し、新しい土地のことばを

使おうとしている者もあるが、少なくともアクセントの上では無アクセントの影響は見られない。東京語でアクセントが安定しているものは C 群でも安定していて、東京語でゆれているものは C 群でもゆれているというように、東京の最近のアクセントの姿をそのまま表している。

本稿では、従来の桜村のアクセントは無アクセントであるというだけで、その実態にはふれずに考察を進めてきた。次回は、東京からの転校生のいない中学校で、桜村で生まれ育った者を対象に調査を行い、今回の調査結果と比較しながら、無アクセントと東京アクセントの接触による影響について検討を進めていきたい。

また、今回は同じような言語的背景を持った被調査者を 1 つの群としてまとめて見てきたが、実際にはかなりの個人差が見られる。他のアクセント形式から受ける影響における個人差も今後の課題としたい。

この調査の実施にあたって、調査の便宜をはかってくださった桜村立竹園東中学校の天貝茂校長、高野幸男先生、また、調査に協力してくださった竹園東中学校の 2 年生のみなさんに心から感謝いたします。

参 考 文 献

- 秋永一枝・佐藤亮一・金井英雄「利根川上・中流域のアクセント」『利根川——自然・文化・社会——』弘文堂、昭和 46 年
- 秋永一枝「共通語のアクセント」『日本語発音アクセント辞典』日本放送協会、昭和 53 年
- 稲垣滋子・堀口純子「東京語におけるアクセントのゆれ——地域差・意識と実態」『ことばの諸相』文化評論出版、昭和 54 年
- 上野善道「アクセントの個人差をめぐる研究概観」『言語生活』320、昭和 53 年
- 金田一春彦監修『明解日本語アクセント辞典』三省堂、昭和 43 年
- 金田一春彦『日本の方言 アクセントの変遷とその実相』教育出版、昭和 50 年
- 金田一春彦「アクセントの分布と変遷」『日本語 11 方言』岩波書店、昭和 52 年
- 金田一春彦「共通語の発音とアクセント」『日本語発音アクセント辞典』日本放送協会、昭和 53 年
- 佐藤亮一「曖昧アクセント地域における話者の型意識について——「比較発音による調査」から——」『ことばの研究』4 秀英出版、昭和 49 年
- 佐藤亮一「アクセントの「ゆれ」をめぐる——曖昧アクセント地域を中心に——」『青山語文』4、昭和 49 年
- 柴田武『社会言語学の課題』三省堂、昭和 53 年
- 清水郁子「東京のある四拍名詞のアクセント分布図——いわゆる AB 型を中心とし

- て——」『独協大学教養諸学研究』6 昭和47年
- 杉藤美代子「アクセント型の聞こえのゆれと発話のゆれ——合成言語によるアクセントの研究」『大阪樟蔭女子大学論集』11、昭和48年
- 杉藤美代子・中塚裕子・高橋美絵「アクセント型の聞こえのゆれと発話のゆれ(その2)——長崎アクセントと大阪アクセント——」『樟蔭国文学』12、昭和49年
- 杉藤美代子「単語アクセントの発話と知覚における個人差及び方言差の定量的研究」『言語研究』74、昭和53年
- 日本放送協会編『日本語発音アクセント辞典』、昭和53年
- 平山輝男編『全国アクセント辞典』東京堂出版、昭和49年
- 平山輝男「アクセント体系の新古とその母体系の判定について」『人文学報』96、昭和48年
- 平山輝男「移住者二世の言語——特に無アクセント地域の場合」『国語学』114、昭和53年
- 『桜村勢要覧 '79』茨城県新治郡桜村発行、昭和54年
- 『新つくば』筑波研究学園都市協議会発行、昭和55年